

小学校社会科の学力像と産業学習の变革

—「自己実現」をキーワードとした単元開発—

木村博一

I. はじめに

本特集において、筆者に与えられた課題は「小学校の社会科産業学習において、新教科書を基盤にどこまで学力を形成しうるのか」である。

まず、「どこまで」という問いに、どう答えればよいのだろうか。義務教育が終了する中学校卒業時あるいは高等学校卒業時を100として、小学校第5学年段階でどの程度まで学力を形成しうるのかを論ぜよと求められたと解釈することもできる。けれども、それに答えることは不可能であり、無意味である。小学校社会科は、中学校社会科を薄めた存在ではない。後述するように、小学校社会科には、他の校種や教科では育成できない独自の学力が存在する。したがって、小学校社会科でこそ育成すべき学力とは何かを明らかにした上で、その最高レベルの学力を形成し得る授業モデルを構築することが、筆者に与えられた課題である。その課題に応じてこそ、小学校社会科は、中等教育のみならず、生涯学習の基礎・基本を培う役割を果たすことができる、と筆者は考えている。

以下、本稿では、与えられた課題に応えるべく、次の手順で考察を進めていく。

II. では小学校社会科でこそ育成すべき学力像を提起する。学力論争という言葉に端的に示されているように、学力とは何かについては多様な見解が存在する。したがって、いかに客観的な立場に立ったとしても、誰もが納得できるように小学校社会科で育成すべき学力像を一つに絞り込むことは難しい。提起という言葉を用いたのはそのためであり、本研究を進めている現時点における筆者の学力観を示して論を進めていく。

III. では小学校社会科第5学年の産業学習について検討する。産業学習の意義と課題を明らかにするとともに、これからの産業学習で育成すべき学力像(育成できる学力像)を明確化していく。

本稿の後半では、最高レベルの学力を形成し得る産業学習のモデル構築をめざして具体的に考察を進めていく。IV. では教材研究と単元構成について具体例を踏まえて論述し、V. では産業学習の達成目標と学習指導過程のモデルを提案する。

II. 小学校社会科でこそ育成すべき学力像

本稿には、社会科成立後の学力論争について整理できる紙幅の余裕がない。そこで、今日の学力観の一端と1998(平成10)年版小学校社会科学習指導要領(以下では「平成10年版社会科」と略記する)の学力観を検討しながら考察を進めていく。

1. 「学んだ成果」としての学力と

「学ぶ力」としての学力

今日、学力をめぐる論議が喧しい。その中で、広く一般に読まれている書物の一つとして、大野晋・上野健爾著『学力があぶない』をあげることができる。同書の中で、上野は「学力」を次のようにとらえている。

私たちが身近に使っている「学力」という言葉は、驚くかなかれ、外国語に翻訳できないのである。それは、学習してどこまで到達したかという、学んだ成果を示す「学力」のほかに、学ぶ力という意味での「学力」があり、この両者が一体となって、わが国では「学力」という言葉をかたちづけてきたからである。したがって、ひとくちに「学力低下」というときに、どちらの学力が低下しているのかをきちんとしておかないと、誤解が生じることになる。大学関係者の多くが指摘する「学力低下」は、単なる知識の量が足りないという学んだ成果を示す「学力」

の低下ではない。どうして学んだらよいか分からない、マニュアル通りにしかできない、という学ぶ力としての「学力」の大幅な低下を問題として現状を憂えているのである¹⁾。

この引用には、「学んだ成果」としての学力と「学ぶ力」としての学力という区分がなされていて興味深い。では、小学校社会科は、どちらの学力に重点を置くべきなのだろうか。筆者は、前者よりも後者の学力を重視する立場をとる。

中等社会科には暗記物というレッテルが貼られ、暗記した知識の量の多さ（学んだ成果）を学力ととらえる傾向があることは否定できない。けれども、社会科を得意とする学生と対話をしていると、それらの知識がまさに言葉だけの皮相な集合体に過ぎず、社会事象を構造的に把握していくための知識として定着していないことがわかる。例えば、鎌倉幕府からの御恩と地頭補任を結びつけて理解できている学生はほんのわずかである。初等・中等教育で学んだ成果としての知識が、大学で歴史を学ぶ力として十分に機能しなくなっているのである。このような状況に陥ってしまうのは、知識をひたすら暗記する習慣は身に付いていても、その知識をもとに社会事象のつながりや意味を深く掘り下げていこうとする構えが身に付いていないためであると、筆者は考えている。

後述するように、小学校社会科では、社会における人間の営みについて調べ、その行為の意味について児童が主体的に考えていく学習を時間をかけて展開している。いいかえれば、小学校社会科は、中等社会科における知識中心の学習に人間的な意味を付与し、対象とした社会事象を多面的かつ構造的に考察していこうとする構えを培うことのできる貴重な場なのである。したがって、小学校社会科で「学ぶ力」としての学力を身につけておくことが、中等社会科における歴史や地理の学習を無味乾燥な暗記から救い出すカギになるというのが、本稿の基本的な考え方である。

2. 新学習指導要領が示す学力像の特色と問題点

「平成10年版社会科」の作成に中心的な役割を果たした北俊夫は、「新しい社会科で育てる資質・能力の授業改善のポイント」として、次の諸点を強調している²⁾。

◇これからの社会科で育てる新しい資質や能力

- (1) 社会事象を多面的に考察し、公正に判断できる能力や態度
- (2) 日本人としての自覚をもち、国際社会で主体的に生きる資質や能力

◇新しい資質や能力を育てる授業改善のポイント

- ・教科書偏重から調べ学習重視へ
- ・知識を覚える授業から学び方習得の授業へ
- ・画一的指導から複線型の指導へ（子ども一人一人の興味・関心や問題意識への対応）
- ・学校らしさを重視した地域密着型の授業へ

この引用に見られる大きな問題点は、社会科の目標と方法面に関する改善点ばかりが強調され、内容に関する観点が希薄なことである。

社会科の場合に限らず、すべての学習方法は、対象とした内容を学ぶための方法である。学びの対象たる内容と独立して、方法が存在するわけではない。内容を深く吟味してこそ、それを学ぶ最も適切な方法が見えてくる。先に引用した北俊夫は「一匹の魚よりも魚の取り方を」³⁾とも主張している。なるほど一網打尽という成句もあるが、漁師はどんな魚でもよいかから漁をしている訳ではない。鮎の友釣りによせよ、小鷹網漁によせよ、鮎漁の方法は、鮎の習性を見極める長年の蓄積のなかで改善されてきたものである。魚を知ってこそ、魚の取り方が決まると考えるのが道理である。

したがって、前項で述べた「学ぶ力」としての学力を育成するという目標を達成するためには、単に学習方法の改善を図っていたのでは不十分である。小学校社会科でこそ育成できる学力、さらに限定すれば、第5学年の産業学習でこそ育成すべき学力とは何かを明らかにする必要に迫られてくる。産業学習の目標と内容を踏まえた上で、そこで育成できる学力とは何かを究明し、それをどのような方法で育成してけばよいのかと考えていくのが、社会科授業研究の基本的な筋道である。

III. 小学校社会科産業学習の今日的課題

一口に産業学習と言っても、これまでに多様な実践が展開されてきている⁴⁾。けれども、本稿では「新教科書を基盤に」という条件づけがなされていることから、「平成10年版社会科」に示された目標と内容を踏まえて考察を進めていく。

1. 小学校学習指導要領に示された社会科産業学習の目標と内容⁵⁾

「平成10年版社会科」の第5学年産業学習の目標と内容を、あえて一言で述べると、具体的な調査や見学、様々な資料の活用などを通して、児童が、我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解し、我が国の産業の発展に関心をもつように学習指導を進めることである。ここで言う「産業の様子」とは、それぞれの産業の分布や特色と、それぞれの産業に従事している人々の工夫や努力のことであり、同様に「産業と国民生活との関連」とは、それぞれの産業が国民生活を支えていること、運輸の働きが私たちと産業を結びつける役割を果たしていることの二つを意味しているものと解釈される。

ここで注目したいキーワードが「工夫や努力」である。「平成10年版社会科」の産業学習は、食糧生産、工業生産、通信などの産業の3領域から成っている。いずれにおいても、その産業に従事している人々の「工夫や努力」について調べ、それが国民生活と深いかかわりをもっていることを理解させるとされている。それに対して、産業の特色や分布について調べる学習は、児童の地理的思考力の育成に大きな意味をもっているにもかかわらず、通信などの産業では除外されている。

さらに、第5学年以外の社会科学習指導要領の内容を参照すると、「工夫や努力」について調べたり考えたりする学習が、小学校社会科の中心的位置づけを与えられていることが浮かび上がってくる。中学年では、児童が「(地域の生産や販売の)仕事に携わっている人々の工夫」や「人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や努力」について考えることとされている。また、中学年の「地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心」、第6学年の「我が国の歴史や先人の働き」は、表現こそ違え、人々の「工夫や努力」の足跡を学ばせようとしている点では共通している。

そこで本稿では、紙幅の制限により、児童が人々の「工夫や努力」について調べて、考えを深めていく産業学習に対象を絞って考察を進めていく。

2. 「工夫や努力」を学ぶ産業学習の意義と課題

(1) 「工夫や努力」を学ぶ産業学習の意義と内容

人々の「工夫や努力」について調べ、考えていく学習が、社会科産業学習の中心的な位置づけを与えられている理由は何なのだろうか。

社会科成立後の学習指導要領をひもといてみると、産業学習が各産業を概括的に理解させるように展開されてきたことがわかる。そのような産業学習に大きな転機をもたらしたのが、1977（昭和52）年の社会科学習指導要領改訂である。

この点について、岩田一彦は「産業学習に個人が登場して内容の中心的位置を占めるようになったのは、昭和52年版の小学校学習指導要領で、具体的事例が取り上げられるようになって以後」⁶⁾のことに指摘している。産業学習に個人が登場し、具体的事例が取り上げられるようになったということは、その産業に従事している人々（個人）の「工夫」⁷⁾の具体的事例が取り上げられるようになったということである。

では、このように産業学習を変化させた理由は、どこに求められるのだろうか。岩田は、この点について「社会科嫌いの子どもが多くなっている事実が報告されて久しい。この原因の1つには、教材に具体的に生きている人間が顔の見えるレベルで出てこないからである。このような具体性のある人の登場は、いろいろな状況で人の行動に、自分の感情を入れて考えることができる。」⁸⁾と述べて、一定の評価を与えている。

伊東亮三も指摘しているように⁹⁾、特定の人物に感情移入して学ぶ「理解」型の認識パターンは、児童の学びを何よりも主体的なものにするという点で大きな意義をもっており、それが産業学習にも援用されたというわけである。

次の1989（平成元）年版社会科学習指導要領では、児童が人々の「工夫や努力」について調べて考えていく産業学習の充実が図られ、取り上げる産業のすべてに適用されている。このときの『小学校指導書社会編』を検討した岩田は、第5学年の産業学習における「工夫や努力」の具体的な内容は、主として「①生産を高める②技術の改良③消費者需要への対応④環境保全、公害防止」の4視点で構成されていると指摘している¹⁰⁾。

(2) 「工夫や努力」を学ぶ産業学習の留意点

人間の行為には必ず何らかの理由や目的が存在する。したがって、理由や目的なしに個人が「工夫や努力」をすることはあり得ない。また、ある目的を達成するために「工夫や努力」をしたからといって、必ずその目的が実現するとは限らない。場合によっては、個人が意図した目的とは正反対の結果になることさえある。

このような目的—行為—結果の関係を十分に考慮することなく、「工夫や努力」という行為に目を向けた学習が展開されると、児童の社会認識はきれいごとで終わってしまう¹¹⁾。「野菜農家のAさんがいろいろな工夫や努力をしているのは、みんなに野菜をたくさん食べてもらいたいからです」といった皮相な社会認識は、その好例である。

情緒的で皮相な社会認識に陥らないようにするために、産業学習では、どのような点に留意して「工夫や努力」を扱っていけばよいのだろうか。岩田一彦は、次の3点を指摘している。

第一は、工夫と努力を分けて扱った方がよいという指摘である。その理由として、岩田は「工夫の内容は事実として把握できる点が多いが、努力の内容は不明確な点が多いからである。工夫を中心に内容構成を行い、その内容との関係で事実で示せる努力に関する内容があれば組み込んでいくべきである。」と述べている¹²⁾。

第二は、工夫の内容そのものを調べる段階と、その工夫を社会的意味と関係させて調べる段階に分けた方がよいという指摘である。後者の具体的内容としては「①生産費用の削減、②生産時間の短縮、③付加価値の増加、等」を挙げている¹³⁾。

そして第三は、最も重要なポイントであるが、経済的合理性基準で人々の「工夫や努力」を説明するという視点である。この点について、岩田は次のように述べている。

人は一定の価値選択をしながら行為をしている。人がなぜそのような行為をしたのかを理解することは、自分の規範的知識の選択に重要な論拠を提供する。社会科学学習における人の行為の意味理解は、道徳的基準、経済的合理性基準、文化的基準等の多様な基準の組み合わせによってなされる。しかし、これらの基準の中で最も重要な働きをしているのは経済的合理性基準である。産業の場合における人々の行為の意味理解は、この経済的合理性基準によって説明

できる。社会科批判の言葉としてしばしば使われてきた「苦勞、工夫の社会科」も、この経済的合理性基準で人々の行為の理解を進めるならば克服できる¹⁴⁾。

3. 社会科産業学習の今日的課題

(1) 産業学習における「生きる力」¹⁵⁾の育成

様々な社会において「工夫や努力」を重ねて懸命に生きている（生きてきた）人々の姿を学ぶことは、それらの人々を範として、児童が自らの在り方・生き方を培っていく教育に通じている。それは、既存の社会や価値観への適応を促すという点では、一定の意味を有していると評価できる。けれども、そのような教育は、見方を変えれば、既存の社会や価値観に児童を包摂しかねない教育を意味している。社会が安定している時代ならば、一定の意義を見出すことができようが、21世紀を迎えた今日は、まさに激動の時代である。人々の「工夫や努力」について調べたり考えたりしながら、児童が自ら主体的に社会の変化に対応していく資質や能力（「生きる力」）を育てていくことのできる産業学習の構築が求められている。

(2) 産業学習における人間性の回復

教科書に取り上げられている農家や自動車工場はもちろんのこと、身近な地域の商店街やゴミ処理施設なども、児童との関わりは概して希薄である。したがって、それらの場所で働いている人々の「工夫や努力」の具体的な姿に迫ることなく、教科書記述をなぞった程度で学習が終わるとすれば、それは全く意味のない授業ということになる。児童が、人々の「工夫や努力」を他人事として認識している状況に変わりがないからである。

このような授業は論外としても、調べ学習に十分な時間を費やして、人々が「工夫や努力」を営んでいる背景に経済的合理性の追求などの理由があることを見出した授業においても、他人事的な認識を払拭できない場合がある。学習対象とした社会事象を客観的科学的に説明しようとするほど、自分自身とのかかわりを意識することが難しくなり、他人事的な認識に傾いてしまうからである。より厳しい見方をすれば、このような授業は、自分がとりたてて「工夫や努力」をしなくても、社会は安泰なのだという認識や価値観を育てていると評価することも可能である。

社会事象を客観的科学的に認識できる能力や資質を形成することは、社会科の主要な教育課題である¹⁶⁾。と同時に、市民的資質（公民的資質）を育むことも社会科の重要な教育課題である。産業学習に引きつけて述べれば、学習対象とした人々の「工夫や努力」の意味や理由（背景）を探究し理解していくなかで、自らの日常生活を顧みることができれば、これらの教育課題は両立できるのではないだろうか。それは、「生きる力」を育む産業学習の構築にも通じている。

IV. 新しい産業学習の単元構想と学力形成

新社会科教科書を活用しつつ、どのような視点で教材研究と単元構成を行っていけば、これまでに提起した学力を育成できるのだろうか。ここでは、「自動車工業」の学習を中心として具体的に考察を進めていく。

1. 教材研究と単元構成のポイント

(1) 社会科教科書記述の検討

日本最大のシェアを誇る東京書籍の「自動車工業」に関する記述は、児童が自動車販売店を見学して学習問題を見つけ、豊田市にある自動車組立工場の生産ラインを見学して、特にシートを取りつける仕事に携わっている人の話を聞き、さらには、シートをつくる工場から送られてきた資料をもとに話し合い、シートの小さな部品をつくらしている工場に見学に行くという展開になっている。

自動車の生産に携わっている人々の「工夫や努力」が、どのように記述されているのかに着目して、その部分を引用すると資料1のとおりである。

これらの記述や写真から児童が理解できることは、自動車工場の人々が品質や安全について話し合いながら協力して作業を進めていること、作業の負担を減らすために機械を使ってシートを取りつける位置まで運ぶ工夫がなされていること等である。また、「シートを取りつける仕事」の記述では、技術者と作業をする人が話し合っ仕事効率的に進めるための「工夫や努力」を重ねている様子がわかる。それに対して、「シートをつくる工場」の記述では、指示書どおりにまちがいのないように作業している人の姿が浮き彫りにされ

資料1：新教科書の「自動車工業」の記述

◇「シートを取りつける仕事」の記述

〈本文〉

「工場では、作業をする人と技術者の人が、つくりやすい部品の開発などを話し合うことがあるそうです。」

「坂本さんの班では、毎日、安全や品質などについて、みんなで話し合いをします。」

「工場では、たくさんの人が同じ気持ちで一台一台の車をつくっているのだと、坂本さんから聞きました。」

「工場のひみつは機械だけでなく、働く人たちの協力にもあるんだね。」

〈写真のキャプション〉

○作業の負担をへらす工夫

昔はシートを手で運んでいましたが、今はこのように機械を使って取りつける位置まで運びます。

○坂本さんと技術者の話し合い

シートの横にすえつける小物入れの引き出しを取りつけやすくする工夫について話し合っています。

◇「シートをつくる工場」の記述

〈工場で働く千葉さんの手紙〉

シートをの形を整えるための金具を取りつけるのがわたしの仕事です。やわらかいぬのに金具を通すので、きずをつけないように気を使います。いくつもの種類のシートを同じラインの上でつくっているの、いつも指示書を確認してまちがいのないように作業をしています。

〈対応する写真のキャプション〉

指示書に示された部品の入っている箱のふただけが開きます。

（『新しい社会 5上』東京書籍、2002年、pp.62-65、より引用者が抜粋）

ている。したがって、自ら積極的に「工夫や努力」を行っている人々の姿よりも、指示書どおりに製品を作るために細かなところに気をつけて働いている「工夫や努力」が目立つ構成になっている。それとともに、従業員が「工夫や努力」を重ねて編み出してきた目に見える成果について学習するようになってきていることも大きな特色である。

(2) 教材研究としての現地調査

本課題研究に当たって、筆者は教材研究の意味も込めて工場見学を行った。訪れたのは、自動車の組立を行っているトヨタ自動車田原工場、自動車のシートを生産しているアラコ豊橋工場、アームレスト（シートの横に据え付ける小物入れ）を生産している日本高周波田原工場である。

資料2：アラコの部品製造理念

人にやさしいこと。心地よさが感じられること。高級感にあふれていること。シートやドアトリムへの感覚的な要求は高度になるばかりです。しかもシートの基本性能として、まず安全でなければなりません。そうした目に見えない要求を満たすべく、素材の研究から人間工学に基づいた設計、トレンドを考えたデザイン、メカトロニクス技術による生産ラインの自動化・省力化まで、あらゆる分野での技術的なアプローチを重ね、車に乗るすべての人が快適と感じることのできる理想のシートをめざしています。目に見えないものだから具現化は難しい。しかし、難しいからこそ挑戦する価値があるというのが部品部門の考え方です。

(※傍点は引用者による)

(アラコ株式会社広報パンフレット【Human First】p.17, より引用)

3つの工場には規模や設備に大きな差があるものの、いずれの工場においても従業員が誇りと責任をもって仕事に取り組んでいる姿が印象に残った。トヨタ自動車田原工場でシートの取り付けを担当している班のリーダーは、班員の個性を尊重しながら、チームとしての協力を考えて、品質改善と生産性向上に取り組んでいると話して下さった。日本高周波田原工場の担当者は、自然な波形をもつ同じドアトリムを生産する技術を従業員が協力して開発したことを誇らしげに語って下さった。アラコ豊橋工場には、従業員がチームで技術改善案を出し合う部屋が整えられていた。そして、アラコの広報パンフレットには、資料2のような記述が掲載されていた。

今回の工場見学で、筆者が注目したのは、トヨタ自動車とその関連工場で働いている人々が自ら「工夫や努力」を重ねて開発した製品(部品)に対する「誇りと責任」をもっていること、そして、その「誇りと責任」が、新たな製品(部品)の開発に「工夫や努力」を傾けていく意欲と考え合う力の源になっているということである。

(3) 教材研究としての文献調査(その1)

筆者が工場見学で導いた「工夫や努力」の核心に「誇りと責任」があるという仮説は、一般化できるものなのだろうか。そこで、トヨタの企業経営を分析した最近の著作を検索して「工夫や努力」の意味を探ってみた。そこで見出したのが、柴田昌治・金田秀治著『トヨタ式最強の経営』の次のような記述である。

AとBの間に標準在庫が10箱あったとする。Aという作業ではときどき異常が発生する。次のBでは作業が順調に進行していて、4箱使用したという「かんばん」がAに渡される。このときA工程で異常が起きて作業が止まっていたとすると、Aから4箱の在庫補充は来ない。しかし在庫はまだ6箱あるからBはそれを使って作業を続けることができ、その間にAの異常が解消されて生産を開始できれば、在庫がバッファーとなってラインは流れ続ける。

しかし標準在庫を5箱まで減らすとすれば、このケースではBが4箱使用した後の在庫は1箱しかなく、A工程の異常発生による生産停止により、すぐにBの生産も止まってしまう。

標準在庫を10箱持っていれば、A工程でたびたび発生している異常の問題はその在庫量に隠されて問題とされない可能性が高い。これを5箱に減らすことで、A工程の抱える問題で工場の生産ラインが停止してしまうから、そこでなんとかしなければという工場全体の問題として顕在化されることになる。

この場合の「かんばん方式」は、問題を顕在化し改善活動を起こさせる仕組みとしてのトヨタの改善方式と理解できる¹⁷⁾。

(※傍点は引用者による)

この引用で注目されるのは、新たな課題に対応した「工夫や努力」を誘発し促進する方策として「かんばん方式」が位置づけられていることである¹⁸⁾。トヨタの自動車工場における個人やチームの「工夫や努力」が、現在から未来に向けての自主的な問題解決の営みとして理解されている。そこに込められているのは、従業員の能力を信頼し、引き出そうとする姿勢である。

ところが、新教科書に記述されている「工夫や努力」は、先述のように、既になされている当たり前の営みだと児童がとらえかねない側面がある。このギャップを活用して、児童が探究を深めていく展開を構想することも可能である。

(4) 教材研究としての文献調査(その2)

—「工夫や努力」の理論的裏付けと適用—

「工夫や努力」の核心に「誇りと責任」があるという筆者の仮説は、トヨタ自動車以外の産業にも広く一般化できるものなのだろうか。そこで、最近の経済学や経営学の文献を検索してみたところ、森正紀著『生産性と人間性の経営経済学』に行き当たった。森氏は、次のように述べている。

生産性は両刃の剣である。人間の豊かさは基本的には生産性に支えられている。それは一人ひとりが創り出す有形無形の富の量に比例しているからである。しかし生産性の向上パターンは様々であって、特定の人間を犠牲にする場合もある。

かくして、生産性と人間性が調和するための可能性をも

たらず第1の条件として、マクロ的には経済成長を、ミクロ的には企業成長をあげることができる。この意味で企業はたえず成長し続けなければならない宿命をもっているといえる。立ち止まった瞬間に問題が噴出するからである。

第2の調和可能条件として、幾つかの生産性向上要因のうち、主体的な労働要因が客体的な職務要因よりも優位な要因となっていることがあげられる。労働要因としては労働能力と労働意欲が、職務要因としては設備・資材・管理（生産方法）があげられる。…（中略）…

欲求が物質的な賃金欲求の段階にあるときには、職務要因の方が生産性にとって抜群の威力を発揮する。労働要因についてはせいぜい適正能力が問題になるにすぎない。

…（中略）…

人間化要求が高度化し、精神的欲求の段階になると、労働要因の中では適正能力よりも、労働意欲の方がクローズアップされてくる。この労働意欲に連なる精神的欲求をさらに詳しく分類すると、人間関係の段階とその上位の自主性（自己実現）の段階に分けられるが、前者では職務要因との対立関係は生じないけれども、後者ではそれが現われる。すなわち人間関係は職務内容への欲求ではなく、職務の周辺的な欲求なので、職務要因とは対立しない。したがって優先順位がつけられたにしても、双方が共に選択されえることになる。しかし自主性の欲求は職務内容そのものへの欲求なので、職務要因との対立関係が発生する。例えばベルトコンベアシステムか自主性かといった二者択一状況はこうした場合にあってはまる。

以上のような場合には優位な方が選ばれて、劣位の方は犠牲になる。高度な人間性としての自主性が選ばれるには、それが生産性にとって職務要因よりも、優位な効果をもたらすことが明らかなる場合に限られる。そしてこの場合には人間性に合わせて職務の再設計が必要となるわけである。例えばベルトコンベアを廃止して、台車による自主作業に変える場合などが実行されている¹⁹⁾。

（※傍点は引用者による）

長い引用になったが、森氏が指摘しているのは、人間性との調和が今後の生産性向上のカギになるということである。物質的な賃金欲求の充足がめざされた高度経済成長期とは異なり、今日の産業社会では、人間性の回復と労働意欲の充足がクローズアップされてきている。したがって、従業員が「自己実現」を図るとともに、「誇りと責任」をもって働ける環境を整備することが、主体的な「工夫や努力」を誘発していくことになる。それがまた自らの仕事に対する「誇りと責任」を生み出し、「自己実現」につながるというわけである。

ここで、トヨタ自動車とその関連工場の「工夫や努力」の考察に戻ってみよう。森氏の言う「人間関係」については、先にも引用した「トヨタ式最強の経営」に次のような記述が見出された。

一人ひとりの人間がこうしたいなと思ったときに、そっちの方が正しいとわかっていても、自分だけしたら損になることが明らかなきときは、普通だれもやろうとしない。しかし、損だと思っただけで、仲間と一緒に協力してくれるとわかっていれば、やることのできるのも人間なのだ。つまりそういう環境を意図的につくっていくことができれば、正しいと思うことを実行できる人は増える²⁰⁾。

（※傍点は引用者による）

次に、人間性と自主性（自己実現）の尊重についてである。トヨタ生産方式を紹介した書物の推薦文において、トヨタ自動車の張富士夫社長は、次のように述べている。

トヨタ生産方式の基本は「人を活かす」にあります。

…（中略）…このように日ごろから「もっと人を大切にしろ」と、ずいぶん教育されましたし、「人間尊重」と「人間性尊重」の違いを教えられたものです。

「人間尊重」は言葉どおりに人間を尊重すること。「人間性尊重」は、人間の持っている「考える能力」を最大限尊重するのと言います。働いている人に対して、「言われたとおりにやれ」では、人間性を尊重したとは言えません。いかにして「考える余地」を与えるかが大切になってきます²¹⁾。

張富士夫社長に「もっと人を大切にしろ」と日ごろから厳しく教育してきたのは、トヨタ生産方式の生みの親と言われる大野耐一氏である。「ずいぶん教育されました」という文面から、「人を活かす」精神が徹底されてこなかったと見なせなくもない。また、大野氏は「人間の本質をきちんと押さえて大切にしようとする人間観」とともに、「人がどういうときに労働強化を強いられていると感じるか、を問い質す姿勢」を持ち合わせていたと評されている²²⁾。前掲の「かんぱん方式」にも見られるように、人間性を尊重した労働と労働強化感を抱く労働とは紙一重の関係にある。それを見定めて、従業員の「考える能力」を信頼するとともに、課題を解決せざるを得ない状況に追い込んで「工夫や努力」を引き出すことにより、生産性を向上させていくのが経営者の仕事である。森氏が指摘していたように、経済成長と企業成長が、生産性と人間性が調和するための可能性をもたらす第一条件に他ならないからである。

そこで、新教科書を基盤とした「自動車工業」の学習では、生産性の向上と自己実現の相乗効果が図られている事例としてトヨタ自動車を取り上げるのが適当であると判断した。

2. 新しい産業学習の他の事例への適用

資料3に紹介した三次ピオーネ生産組合の農業経営は、本稿で述べてきた生産性と人間性の調和が図られた典型事例の一つである。その他にも、人々が「誇りと責任」をもって「工夫や努力」を重ねている事例としては、最近スーパーなどで見かける生産者名を公表した無農薬野菜づくりや、

資料3：三次ピオーネ生産組合の「責任分担制」

三次ピオーネ生産組合は1974年に設立された。

35.6ha のぶどう畑に、ベリーA、デラウェアも少し栽培していたが、何と言っても、ピオーネは当時の新品種で、「黒い真珠」と呼ばれるほど高価な果物だったので、生産組合ではピオーネをぶどう栽培の中心にしようと考えた。具体的には、35.6haの土地に3600本のぶどうの木があり、組合員21人と、組合が雇った130～150人の人々が協力して、ぶどうの管理栽培に取り組んできた。にもかかわらず、1983年以前は現在のように生産量が伸びず、ぶどうづくりに行き詰まっていた。

その間にも、品質をたもちながら生産性を高めるための工夫や努力が続けられてきていた。人それぞれに顔形が違うように、土壌一つをとっても畑によって違いがある。また、日当たりも南向きと北向きの畑では生育が違ってくる（消毒や施肥のタイミングも異なってくる）。このようにぶどう一本一本に個性があり、自然条件も違うということになれば、日ごと人が変わっていたのでは一つの木を完全に管理することはできない。

そこで、栽培を始めてから8年目（1982年）からは「責任分担制」を取り入れることにした（その成果が1984年から始まった）。一人一人の組合員が、一定区画のぶどうの木を責任をもって管理していくのである。これによって、かなり生産性が高くなった。給与は一定のペースで決まっていますが、自分の分担している区画の中で品質のよいぶどうをたくさんつくれば、その分だけ給与として給与に加えられる。一人一人の生産努力が認められるということで、みんな張り切って働くようになった。

と同時（1982年）に、3つの班を編成して適宜作業の遅れなど個別分担では対応できない場合の相互援助、補完を実施するほか、施設の被覆作業など作業の性質による効率性も勘案して全員で実施するものを区分けするなど、連帯と協同の本質を堅持している。

（上段：山本和彦（語り手）「三次ピオーネ物語」および下段：朝日農業賞「中央審査委員の現地報告書」1989年、より引用者が抜粋）

卓越した技術で業界をリードしている町工場など、それぞれの学校の近くでも探せば見つかりそうなものが多い。それらを活用すれば、社会科の産業学習や地域学習が、教師にとっても、児童にとっても、楽しく意義深いものになるはずである。

V. 新しい産業学習の到達目標と単元構想

1. 到達目標

以上の考察により、新教科書を活用して展開する新しい産業学習の輪郭が明確になってきた。その到達目標は、次のようにまとめることができる。

[社会的な事象への関心・意欲・態度]

◇人間らしい生き方を求める意欲や態度

- ・生きがいを求める意欲や態度
- ・誇りと責任をもった生き方

[社会的な思考・判断]

◇人間らしく考える力

- ・自分らしく考える力
- ・他とともに考え合う力

[観察・資料活用の技能・表現]

◇人間の営み（の意味）を鋭く観察する（読み取る）力

◇自分らしく、人間らしく表現する力

[社会的な事象についての知識・理解]

◇人間の営みの意味についての知識・理解

- ・人々が営んでいる工夫についての知識
- ・人々が工夫や努力をする理由に対する理解

2. 学習指導過程のモデル

社会科教科書の記述を手がかりとして、その産業では「人々がどのような工夫や努力をしているのか」を考えるのが第一段階である。そこから一歩先に進んで、「この産業に従事している人々は、なぜこのような工夫や努力をしている（する）のだろうか」と問いかけて、「工夫や努力」の意味や理由を考えるように方向づけていきたい。すると、児童からは「お金をもうけるため」あるいは「人々に喜んでもらうため」といった発言がなされることだろう。けれども、このような表面的な理解で授業を終えたのでは、児童が人々の「工夫や努力」に関する認識を深めないまま授業を終えてしまうことになる。

そこで、農家や工場などでなされている「工夫や努力」を児童がイメージ豊かに理解できるような具体的な教材を示し、「これらの人々は、なぜこのような工夫や努力をしている（してきた）のだろうか」という問いを生み出して授業を展開していきたい。ここで生きてくるのが、教材研究段階における教師の丹念な取材と切り込みである。

こうして児童は、様々な資料を活用し、見学や調査を行って追究を進める中で、人々が自らの仕事（「工夫や努力」の成果）に対して「誇りと責任」をもっていることに触れていくことになる。それに加えて、彼らの「工夫や努力」が単に利益や報酬を得ることをめざしたものではなく、自らの存在意義を確認し高めていく「自己実現」の営みであることを理解できるように児童を指導（支援）していきたい。と同時に、彼らの「工夫や努力」は、過去に達成された成果だけではなく、新たに生じた課題を解決しようと意欲的に試行錯誤を重ねている未来に向けての挑戦的な営みであり、現在進行形であることにも気付かせていきたい。

このような学習指導モデルを提示すると、人々の行為に対して「なぜ」と問いかけて「工夫や努力」の意味や理由を探究していくことは、小学生には難しすぎる学びではないかという批判も想定される。けれども、人間としての生きがい（自己実現）に還元されたときに初めて、人々が「工夫や努力」を行っていることの意味、「工夫や努力」をしようとする動機を実感として理解できるのではないだろうか。なぜならば、子どもたち自身が、家庭・学校・地域社会で直面する問題の解決に悩み、自己の内面的な問題の解決についても模索を重ねて、「自己実現」を図っている存在に他ならないからである。本質を学ぶことは、決して難しい見方・考え方を習得することではなく、誰にでもわかる（共感できる）ことに還元できる見方・考え方を学ぶことだと、筆者は考えている。

VI. おわりに

本稿の結論は次の2点に集約することができる。

第一は、小学校社会科における学力観の変革である。「学んだ成果」を重視する学力観から「学ぶ力」を重視する学力観への転換については既に

述べた。ここでは、さらに進めて「学ぼうとする力」としての学力を育成することが、小学校社会科、特に産業学習の大きな役割であると結びたい。

「学ぼうとする力」を育むための方法としては、社会的構成主義の授業などが注目を集めている²³⁾。それに加えて産業学習では、人々が現状の課題を解決しようと「誇りと責任」をもって取り組んでいる「工夫や努力」を教材として活用することによって、相乗的な効果もたらされることになる。生涯学習の基礎としての「学ぼうとする力（学び続けようとする力）」、すなわち、学びの芯（基本）となる力を育成することこそ、小学校社会科（特に産業学習）が担うことのできる最も大きな役割であるというのが、本稿の第一の結論である。

第二の結論は、日常生活における児童の営みと社会における人々の営み（工夫や努力）を結びつけた授業づくりが、真の学力を形成するカギになるということである。そこで本稿では、小学校社会科、特に産業学習における学力形成のキーワードを「自己実現」、すなわち、社会における自身の存在意義を探ることに求めたわけである。

翻って、今日子どもたちに目を向けると、自身の悩みを解決するために「工夫や努力」を繰り返しながらも、自身の存在意義の軽さにもがき、苦しんでいる姿が浮かび上がってくる。「（進学のために）勉強すればよい」という恵まれた環境に置かれることは、家庭や学校において自身の存在価値を見出せないという悩みにつながっている。それだけではない。集団における自身の存在価値を見出しづらくなっていることは、集団に対して自身の心を閉ざしても生きていけることを意味しており、それが悪循環となって、場合によっては、自己顕示のための問題行動となって現れている。「今日の子どもは群れているが、集団として機能できていない」と多くの教師が指摘するのは、子ども同士が関わり合えなくなってきた現れであり、子どもが社会との関わりをもてなくなってきた証左でもある。

だからこそ、子どもたちは自身の存在意義を確認したがつているのであり、「自己実現」を図る機会を求めている。子どもと同じように、大人も自らの存在意義を求めて試行錯誤を繰り返しており、「自己実現」を図るために「工夫や努力」を

重ねている。この接点で共感と学習が成立したとき、児童は「生きる力」の基礎を培うとともに、社会について学び続けていこうとする力を身につけることができる。本稿では、そのような学力を「学びの芯（基本）となる力」と呼んで、育成することの重要性を論じたわけである。

註

- 1) 大野晋・上野健爾『学力があふない』岩波書店, 2001年, p.78。
- 2) 北俊夫編著『改訂小学校学習指導要領の展開 社会科編』明治図書, 1999年, pp.18-27。
- 3) 北俊夫『「社会科の授業」はどう変わらなければならないか』明治図書, 1997年, p.2。
- 4) 斎藤孝他編『小学校社会科5年(上・下)』民衆社, 1983年, 1986年, 木村博一・岡崎社会科授業研究サークル編著『農業を学ぶ授業を創る』黎明書房, 1995年, などを参照。
- 5) 北俊夫編著, 前掲書2), pp.202-212。
- 6) 岩田一彦編著『小学校産業学習の理論と授業』東京書籍, 1991年, p.67。
- 7) 文部省『小学校学習指導要領』東洋館出版社, 1977年, pp.28-30。
- 8) 岩田, 前掲書6), p.68。
- 9) 伊東亮三『社会科授業理論の認識論的基礎づけ(I)―「追体験し意味を理解する社会科」の場合―』『日本教科教育学会誌』第8巻第1号, 1983年, p.31。
- 10) 岩田, 前掲書6), p.67。
- 11) 上田薫『社会構造の学習と人間についての学習』『教育科学社会科教育』No.111, 明治図書, 1973年, を参照した。
- 12) 岩田, 前掲書6), p.69。
- 13) 同上書, pp.69-70。
- 14) 同上書, p.10。
- 15) 「中央教育審議会第一次答申(全文)」『初等教育資料』No.655, 1996年, p.71。
- 16) この点については, 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978年, に詳しい。
- 17) 柴田昌治・金田秀治『トヨタ式最強の経営―なぜトヨタは変わり続けるのか―』日本経済新聞社, 2001年, pp.54-55。
- 18) トヨタの「かんばん方式」を「生産方式」ととらえ, その意味を客観的に説明できることを

めざした授業研究の成果が, 小山直樹「小学校社会科概念探求学習の創造―「トヨタ生産方式の秘密」学習と「クロネコヤマト宅急便快速進軍の秘密」学習を中心に―」全国社会科教育学会『社会科学研究』第39号, 1991年, である。

- 19) 森正紀『生産性と人間性の経営経済学』中央経済社, 1997年, pp.211-213。また, 本稿執筆途上の2002年5月に神野直彦『人間回復の経済学』(岩波新書)が出版された。同書にも次のような記述がある。

アメリカの心理学者マズローの欲求段階説によると, 人間の欲求は生理的欲求, 安全欲求, 社会的欲求, 自我欲求, 自己実現欲求という, 低次から高次の欲求へと段階的になっている。低次の欲求が充足されてしまうと, いくら賃金を引き上げても, 仕事のやりがいなどの高次欲求の充足を求めようになり, 労働の志気が上昇しないことになる。

高次欲求が頭をもたげるためには, 低次欲求が安定的に充足されていなければならない。つまり, 生活に必要な不可欠なニーズという低次欲求が充足されると, 協力という社会的欲求や自発的創意という自己実現の欲求という高次欲求が芽生えてくる。そうした高次欲求の充足なしには, 生産性の向上が望めなくなってしまうのである。(p.78)

- 20) 柴田・金田, 前掲書17), p.25。
- 21) 張富士夫「トヨタ生産方式は『人間のためのシステム』である」若松義人・近藤哲夫『トヨタ式人づくりモノづくり』ダイヤモンド社, 2001年, p.iii。
- 22) 柴田・金田, 前掲書17), pp.26-27。
- 23) 社会的構成主義の授業については, 佐藤公治『認知心理学から見た読みの世界―対話と協同的学習をめざして―』北大路書房, 1996年などを参照。また, 長岡文雄『考えあう授業』黎明書房, 1972年, も示唆に富んでいる。

付記: 本稿は, 2001年10月13~14日に広島大学で開催された全国社会科教育学会第50回研究大会の「課題研究 I 新教科書を基盤にどこまで学力を形成しうるか―小学校社会科―」における筆者の提案「小学校社会科でこそ育成できる最高の学力形成を―小学校第5学年の産業学習を事例として―」に加筆・修正を施したものである。

本研究に当たっては, トヨタ自動車田原工場, アラコ豊橋工場, 日本高周波田原工場とともに, 財団法人教科書研究センターに格別の取材協力を賜った。ここに記して謝意を表したい。

(広島大学)